

# ヒバク回としての八月

「あの日のことを思うと涙が止まりません」8月6日のテレビ画面には、止めどもなく流れる涙を拭くことなくそう語る年老いた1人の男性の表情が映し出されていた。69年の歳月を経ても今なお忘れることが出来ない惨状の記憶。今年も長崎の平和宣言には、福島原発事故による被災者への支援の内容が盛り込まれていた。形は違えどもヒバクの不安と、核の恐怖を共有している被爆地と福島

## 被災地ヒマワリ 花大輪

上京 平安女学院中・高生が栽培



平安女学院中・高の校庭で大輪の花を咲かせたヒマワリ

(京都市上京区) 撮影・安達雅文

### 採種し広く配布へ 思い新た「長く支援を」

東日本大震災で被災した宮城県気仙沼市のヒマワリが、生徒有志が被災地支援を続けている平安女学院中・高(京都市上京区)の校庭で大輪の花を咲かせている。生徒は、太陽に向かうたくましい姿に「震災を忘れず、息の長い支援を続けたい」と思いを新たにしている。

「被災地応援実行委員会」の中学、高校生35人。震災の1カ月後から生徒が実行委を立ち上げ、被災地に布団や文房具を送るなど支援をしてきた。今年には被災地のヒマワリの種を各地に広める活動に協力し、5月末に約100粒の種をまいた。

生徒たちが水やりなどの世話をし、ヒマワリは順調に育ち、2メートル以上に伸びた株もある。委員長の清家未来さん(18)は「種が採れたら、先生や生徒の自宅で咲かせてもらうように呼び掛けた」と話していた。

(関野有里香)

校庭の向日葵が咲き誇る夏期休暇中、京都新聞社の取材を受けました。8月9日朝刊の記事を紹介し、実行委員長が顔が半分しか映ってないのが残念！そして、翌日の台風で向日葵が何本も折れてしまい残念

# 「震災とマンガ」を紹介しましょう！

8月3日付朝日新聞ニュースの本欄では、「震災とマンガ」として、6冊のマンガが紹介されていました。「震災と原発事故が現在進行形の災害として今なお多くの人々の生活を圧迫していることを私たちは知っている。ただ、時間とともに関心が薄れつつあることも否めない。そんななか、漫画家たちはさまざまな形で、震災を記録と記憶に残そうとしてきた。」

そう書かれ紹介されていたマンガは図書館に置いてもらっています。是非読んで下さい。「室町玄関震災掲示板」においても紹介しています。

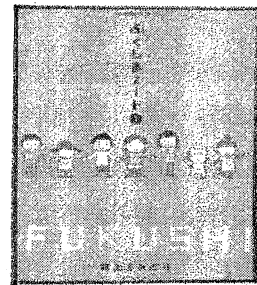
福島原発事故を扱った作品が多い中で、

「はじまりのはる」は、原発事故による放射性と風評被害に苦しむ福島の高校生たちを描いていて、彼らが事故後自らの進路を模索する姿に胸打たれます。福島は椎茸栽培で生計を立てる農家が多く汚染された椎茸栽培農家の息子として… また、汚染された乳牛を殺傷し、廃業に追い込まれた酪農家の息子として…その友人たちの思いや変化が… この続きは読んで下さい！



「ふくしまノート」は、あの日から、福島の子どもや、福島の人々がどんな思いを

抱いて生活しているのかを著者が丁寧に取材を重ねて、福島の「今」を感じて欲しいと願い、さまざまな家庭を描いています。読後の感想としては、「避難生活」を一言で表現していた無知と、子どもの未来に向き合う大人の責務がひしひしと伝わる作品です。さて、どんな家庭がどんな思いで「今」を暮らしているかは読んでみて下さい！



「いちえふ」は、著者が実際福島原発作業員であるため、作業の実態について微に入り

細に渡り描き、現場の緊迫感溢れる空気が伝わってきます。

その他については、紙面の関係で表紙紹介です。感想をお寄せ下さい！

